

1. フェロモントラップによるモモノゴマダラノメイガの発生予察に基づく効率的防除法（技術）			
[要約] フェロモントラップでの越冬世代の誘殺始め約 15 日後から 6 月下旬まで、残効の比較的長い（10 日以上）殺虫剤を散布すれば、モモノゴマダラノメイガを効率的に防除できる。			
研究室名	病虫研究室	連絡先	086-955-0543

[背景・ねらい]

モモでの減農薬栽培の取り組みとして、シンクイムシ類などに対して防除用のフェロモン剤の利用が進みつつある。しかし、このフェロモン剤にはモモノゴマダラノメイガの有効成分が入っていないため、本虫が発生する時期以降には殺虫剤散布が必須となる。そこで、フェロモントラップを利用した効率的な殺虫剤散布時期を検討し、散布回数の削減を図る。

[成果の概要・特徴]

1. フェロモントラップでの誘殺消長と果実での産卵・被害消長との関係をみると、越冬世代の誘殺始め約 15 日後から果実への産卵が始まり、さらにその約 10～15 日後から被害が発生し始めた（図 1）。したがって、殺虫剤散布は誘殺始め約 15 日後から開始すればよいと考えられた。
2. 有袋栽培において 7 月上旬と 7 月中旬の殺虫剤散布を削減した場合の収穫期の被害果率は 3.2%であった（表 1）。

以上の結果、供試したダイアジノン水和剤 34 の本虫に対する残効は 7 日程度と短いことから、シンクイムシ類に一般的に使用される比較的残効の長い（10 日以上）殺虫剤を使用すれば、7 月上旬と 7 月中旬の殺虫剤散布の削減は十分可能と考えられる。

[成果の活用面・留意点]

1. 本法は防除用のフェロモン剤を処理したモモ園でも活用でき、殺虫剤散布の削減が図られる。
2. 防除効果を高めるため、第 1 回目の殺虫剤散布は袋掛け前に行う必要がある。
3. 残効の長い殺虫剤については、平成 17 年度試験研究主要成果「モモノゴマダラノメイガ若齢幼虫に対する各種殺虫剤のモモ果実での残効性（情報）」を参照。

[具体的データ]

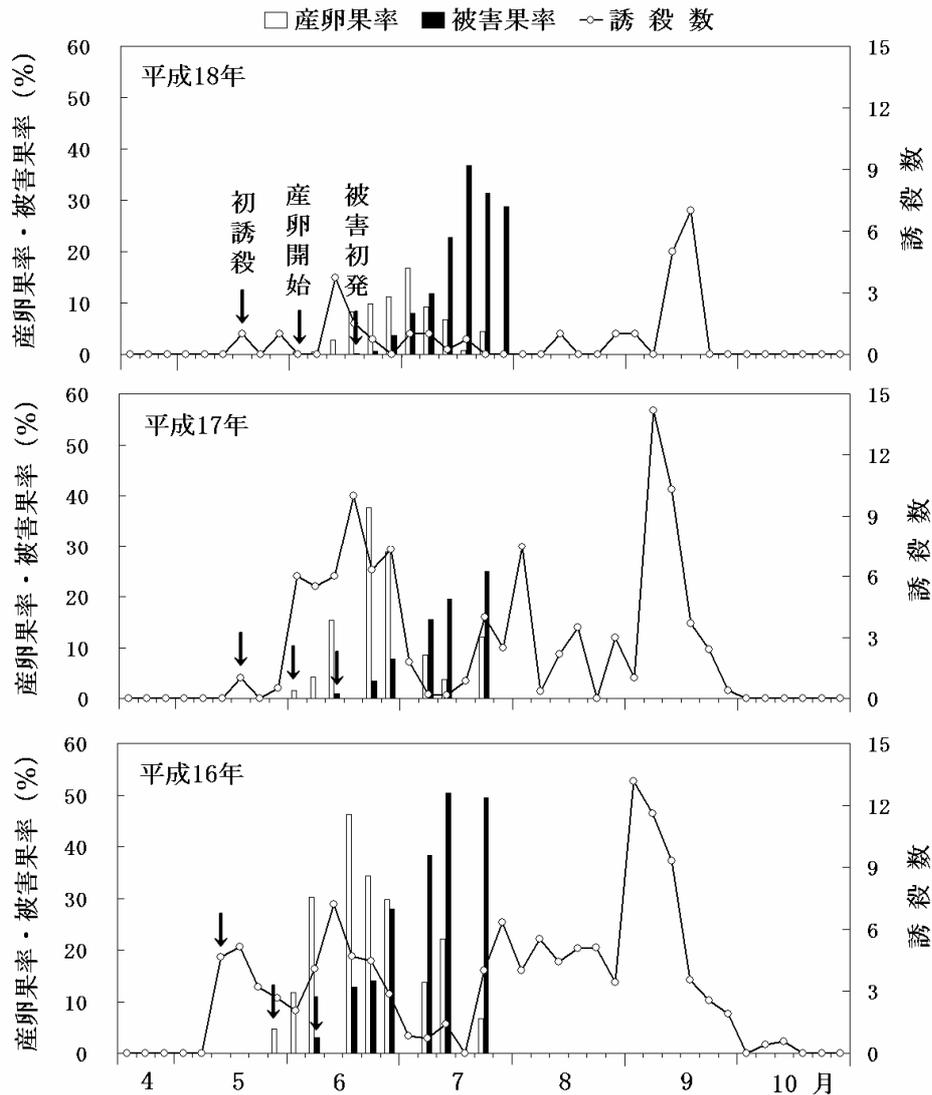


図1 モモノゴマダラノメイガのフェロモントラップでの誘殺消長と果実での産卵・被害消長との関係

表1 モモノゴマダラノメイガに対する殺虫剤の散布時期と収穫期の果実被害 (平成18年)^z

試験区	ダイアジノン水和剤34 ^y の散布時期						散布回数	有袋		無袋	
	5.下	6.上	6.中	6.下	7.上	7.中		調査果数	被害果率(%)	調査果数	被害果率(%)
A	○	○	×	×	×	×	2	525	8.4	206	45.6
B	○	○	○	×	×	×	3	460	5.7	288	30.6
C	○	○	○	○	×	×	4	555	3.2	501	24.4
D	○	○	○	○	○	○	6	560	0.7	500	8.6

^z 8月2日調査

^y モモノゴマダラノメイガに対する残効は7日程度と短い

[その他]

試験研究課題・事業名：フェロモントラップを利用したモモノゴマダラノメイガの効率的防除法の開発

予算区分：交付金（病害虫防除農薬環境リスク低減技術確立）

研究期間：平成16～18年度

関連情報等：平成17年度試験研究主要成果「モモノゴマダラノメイガ若齢幼虫に対する各種殺虫剤のモモ果実での残効性（情報）」
平成17年度試験研究主要成果「モモノゴマダラノメイガの誘引性を高める新しい性フェロモン剤（情報）」